第１回

いのちの作文コンクール

作品集

もくじ

◆入賞作品

〈小学校低学年の部〉

最優秀賞

大和高田市立浮孔西小学校　二年　友田　紬

優秀賞

広陵町立真美ヶ丘第一小学校　二年　江本結織

奈良市立椿井小学校　二年　木村梨新

奈良市立大安寺小学校　二年　山口将輝

〈小学校中学年の部〉

最優秀賞

王寺町立王寺南義務教育学校　三年　杉本一咲

優秀賞

王寺町立王寺南義務教育学校　四年　上田瑛人

王寺町立王寺南義務教育学校　四年　小倉樹里

大和高田市立浮孔西小学校　四年　猶原悠太

〈小学校高学年の部〉

最優秀賞

八尾市立曙川東小学校　六年　彦坂歌純

優秀賞

大和高田市立浮孔西小学校　五年　吉村斗我

八尾市立曙川東小学校　六年　安達美結

八尾市立曙川東小学校　六年　本多玲奈

〈中学校の部〉

最優秀賞

大和高田市立高田西中学校　一年　小澤凛久

優秀賞

山添村立山添中学校　三年　浦　愛佳

橿原市立畝傍中学校　三年　梶　陽咲

大阪教育大学附属天王寺中学校　三年　竹本理央

◆佳作受賞者一覧

◆学校賞一覧

◆「いのちの作文コンクール」によせて

◆「いのちの作文コンクール」審査委員

〈小学校低学年の部〉

最優秀賞

はじめてのゴーちゃん

大和高田市立浮孔西小学校
二年　友田（ともだ）　紬（つむぎ）

わたしは、このなつ、はじめてかていさい園にチャレンジしました。おかあさんとホームセンターに、やさいのなえを見にいって、ゴーヤをそだてることにしました。

土をたがやしてから、なえをうえて水をあげました。

まい日、水をあげてせいちょうを見まもりました。すこしずつはっぱがのびていきました。

それから黄色い花がさきました。

おかあさんとゴーヤを見ていると、黄色い花にちょうちょやアリ、ハチがとんできました。おかあさんが、

「じゅふんしてくれているんだよ。」

と、おしえてくれました。

わたしは、ハチをいつもこわがっていたけれど、ハチにもよいところがあるんだなとおもいました。

そして、なん日かしてゴーヤの赤ちゃんを見つけました。赤ちゃんは、すごくかわいくて、わたしはゴーちゃんと名前をつけました。

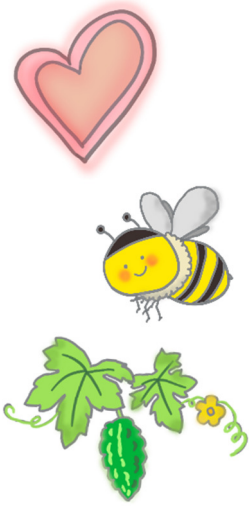
ゴーちゃんは、ちょっとずつ大きくなって、雨がふったつぎの日は、とくに大きくなっているようにかんじました。

ゴーちゃんは、わたしの手のひらをこえるぐらいの大きさになって、ぶじにしゅうかくをむかえました。

さいしょは、はっぱだけだったゴーちゃんが、みのってふしぎだとおもいました。

いろんなしょくぶつは、虫やわたしたちにもえいようをくれて、すごいです。しょくぶつも虫などがいないとじゅふんできないし、いろんないのちがつながっているんだなぁとおもいました。

おにわには、ゴーちゃんのきょうだいたちがいっぱいそだっています。



優秀賞

いのちの学しゅう

広陵町立真美ヶ丘第一小学校
二年　江本（えもと）　結織（ゆおり）

この前、うだ・アニマルパークのいのちの学しゅうをしました。わたしは、ペットなどをかっていないので、いのちの学しゅうをならうまでは、どうぶつについてしらないことがたくさんありました。いのちの学しゅうは、三つのプログラムにわかれていました。

一つ目は、わたしたちの小学校にきていただき、人間とどうぶつがつながっていることをおしえてもらいました。「ペット」とは「こころ」で、「かちく」とは「せいかつ」で、「やせいどうぶつ」とは「かんきょう」でつながっていることをしりました。

二つ目は、うだ・アニマルパークに行って、がくしゅうしてきました。そこでは、自分のしんぞうの音を聞きました。しんぞうの音はゆっくりとした音でした。お友だちのしんぞうの音も聞くことができました。はやい子もいれば、わたしといっしょでおそい子もいたりして、おもしろいなぁと思いました。どうぶつにも同じようにしんぞうがあって、同じようにこころがあるとわかりました。だから、どうぶつにもやさしくしてあげたいなぁと思いました。

三つ目は、学校でわたしたち人間と、どうぶつとのやくそくを、ならいました。どうぶつたちがしあわせにくらせるようにするために、わたしたちができることをかんがえました。ペットに合ったえさを用いする。一しょにあそぶ。やさしくする。まいにち、せわをする。おんどかん理をする。小やをきれいにする。もらったいのちを大切にのこさず、かんしゃして食べる。けんこうかん理をする。広い場しょでほうぼくする。ゴミをすてない。川をきれいにする。木をうえる。空気をよごさない。

大声を出さない。むやみに近づかない。しぜんはかいをしない。いのちあるものに、わたしたちは、もっとありがとうの気もちをもってかんがえていきたいなぁと思いました。

ようちゃんとおじいちゃん

奈良市立椿井小学校

二年　木村（きむら）　梨新（りにあ）

ぼくは、なら町にすんでいます。なら町にはようちゃんというねこがいます。ようちゃんは、おじいちゃんと二人でくらしています。

ある日、ようちゃんがぼくの足のところに、

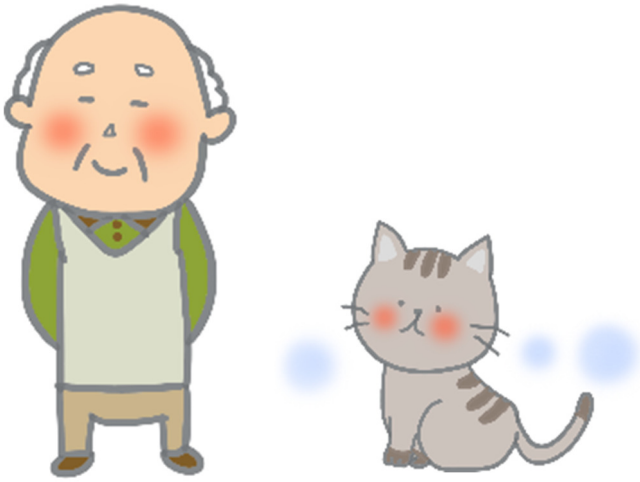
「ニャオー。」

といって、すりすりしてきました。つぎの日もよってきました。いつもとちがうので、お母さんにきくと、

「それは、おじいちゃんが入いんして、さびしいのかもしれない。」

と、いいました。それを聞いて、かわいそうだと思いました。もし、ぼくもお父さんやお母さんがいなくなって一人ぼっちになったらいやです。かなしいです。だから、ぼくは、ようちゃんとたくさんあそびました。

ようちゃんのおじいちゃんには、長生きしてほしいです。ぎゃくに、ようちゃんがいなくなったら、おじいちゃんがかなしくなると思います。だから、ようちゃんにも長生きしてほしいです。



いのちのじゅぎょう

奈良市立大安寺小学校
二年　山口（やまぐち）　将輝（まさき）

ぼくは、十月十四日に、遠足でうだ・アニマルパークに行きました。そこで、いのちのじゅぎょうをうけました。

ぼくが心にのこったことは、二つです。

一つ目は、友だちのしんぞうの音と自分のしんぞうの音を聞いたことです。友だちのしんぞうの音と自分のしんぞうの音が、ぜんぜんちがいました。ぼくのしんぞうの音と友だちの音を聞きくらべてみました。ぼくのしんぞうの音は、「ドクンドクンドクン」と、なっていました。友だちのしんぞうの音は「ドクドクドクドク」と、なっていました。そこで気がつきました。みんなそれぞれちがう音でびっくりしました。なぜかというと、みんな音が、いっしょだと思っていたからです。

二つ目は、犬の気もちを、ホワイトボードに書いたことです。どうぶつは、やりたいことや、やってほしいことがあると思いました。じつは、ぼくも家で犬をかっています。その犬の名前は、ナナといいます。ナナは、ぼくが家に帰ったら、おでむかえしてくれて、とてもうれしいです。毎日おでむかえをしてくれるし、たまにぼくがねるベッドにねてくれてうれしいです。ナナは、頭をなでさせてくれるし、ぼくの顔をスリスリさせてくれて、うれしいです。毎日、夜にごはんがほしいときに、ナナは、クンークンーとないています。犬の気もちをホワイトボードに書いたときに、うちのナナがくらしやすいことをしているか考えていました。ナナは、毎日元気にくらせているから、ぼくは、ナナをくらしやすくしているとおもいます。

これからも、ナナが元気にくらせるように、がんばりたいです。ナナには長生きしてほしいです。

〈小学校中学年の部〉

最優秀賞

命のたいせつさ

王寺町立王寺南義務教育学校
三年　杉本（すぎもと）　一咲（かずさ）

二年生の夏の出来事です。

私は、二年生の夏に、自分の赤ちゃんの時の写真を家にかえっていんさつしてもらうじゅぎょうがありました。私は、自分が赤ちゃんの時の写真がどんな写真かわくわくしました。

お母さんに、私の小さいころの写真があるか聞きました。お母さんは、

「一さの小さいころは、かわいかったわ。」

と、言っていました。

私は、自分の小さいころの写真を見て、自分で、

「かわいい。メロンパン食べてる。」

と、言ってしまいました。

私は、今をふりかえって、生まれてきてよかったと思いました。

私は、今からでもお母さんに、

「元気に生んでくれてありがとう。」

と言いたいです。

お母さんは、どう思っているかは知りませんが、私は、お母さんにとてもかんしゃしています。

二年生のときに、はじめて命のたいせつさを知りました。

私が生まれる前に、せいべつは知りませんが、お兄ちゃんかお姉ちゃんが死んでしまいました。でも、そのおかげで私が生まれてきました。今は、空にいるお兄ちゃん、お姉ちゃんに、

「とてもありがとう。」

と言いたいくらいとてもかんしゃしています。今は、お姉ちゃんが一人いてとても楽しくあそんでいます。今のお姉ちゃんがいなければ、私は一人ぼっちでさびしかったと思います。今のお姉ちゃん、空のお兄ちゃん、お姉ちゃん、お母さん、

「とてもありがとう。」

優秀賞

ハムスターのいのちについて

王寺町立王寺南義務教育学校
四年　上田（うえだ）　瑛人（えいと）

ぼくがかっていたハムスターが、かいき月食の日になくなりました。それはかいき月食の日の朝、学校を出るまえに見ようと思って見たら、外でハムスターがたおれていました。ぼくはしんでしまったことをさけんで泣きたかったけど、なんとか歯をくいしばって学校にいきました。学校から帰ったら、お母さんがおはかに入れるじゅんびをしていました。すぐにうめたらかなしいのでお母さんたちに、

「あしたにしよう。」

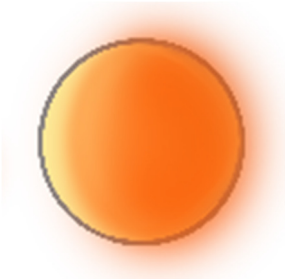
と、言いました。するとお父さんが、

「今日はかいき月食で天のうせいもかくれるとくべつな日だから、今日うめてあげたほうがしあわせやと思うで。」

と、言ってくれて、うめることを決意できました。

ぼくはこんなにかなしくなったのははじめてだったので、命は生きている時に、たくさんの幸せを作らないといけないと思いました。なぜなら、命はかぎられていて、はかないものだなと思ったからです。

ぼくは、この出来事をふりかえり、命はたいせつなもので、ぼくがかっているハムスターがしんでかなしかったので、ぼくがしんだら周りの人もかなしくなると思いました。



大切な命について

王寺町立王寺南義務教育学校
四年　小倉（おぐら）　樹里（じゅり）

わたしのおばさんは、がんでなくなってしまいました。おばさんの姉が、わたしのおばあちゃんです。いつもおばあちゃんは、ぶつだんの前で悲しんでいます。わたしも、おばさんから図かんをもらったり、いつもやさしくしてもらったりしました。わたしの家は、おばさんの家まで遠いので、お正月の時くらいしか会えませんでした。

わたしは、おばさんがなくなってからは、「死ね。」という言葉は言わなくなりました。ケンカなどで言っている人がいますが、病気で命を落としたくないのになくなる人がいます。それなのに、「死ね。」と言うのはダメだと思います。「死ね。」と言って、言われた人がきずついて本当になくなってしまったら、家族などがとても悲しみます。

わたしは、命はとても大切なものだと思います。「死ね。」という言葉で本当に命を落とす人がいます。命は一度なくなってしまうと、もう二度と戻りません。だから、「死ね。」という言葉は言ってはいけないと思いました。

いのちの大切さ

大和高田市立浮孔西小学校
四年　猶原（なおはら）　悠太（ゆうた）

ぼくは、ねこをかっています。動物愛ごセンターからもらってきました。名前はきなこです。今は三才で、元気です。

ねこのじゅ命は人間よりも短いので、最後まで責任をもって、お世話をするように母に言われました。ぼくは、いつかは、死んでしまうんだと思いました。ねこのじゅ命は、約二十年だと言われています。きなこは三才です。ということは、あと十七年ほど生きます。長生きしてほしいからお世話をします。たとえば、トイレをキレイにする、ごはんとお水をやる、部屋やケージをきれいにする、病気になれば病院へつれていく、そしてよぼう薬をぬるなどのことをします。ときどきねこパンチをされますが、ねこパンチされても、すぐ笑ってかわいがっています。運動不足にならないために、たまに遊びます。動物愛ごセンターから来た時から人なつこくて、鼻に指をおくと、スリスリしてくれます。最初はこわいと思っていたぼくですが、今となっては仲良くなっています。

ところで、動物愛ごセンターには、たくさんのねこがいました。家族になってくれそうな人を待っていました。野良ねこや愛ごセンターにいるねこたちにも、新しい家族にもらわれてほしいです。そしてぼくは、母に、

「どうしてもう一匹ねこをかわないの？たくさんいた方が楽しいんじゃない。」

と聞くと、

「初めてねこをかうから、責任をもってお世話できるように一匹にしたよ。」

と、言いました。たしかに、一匹のねこの「いのち」を大切にしようと思いました。

このように、「いのち」は、大切だと分かりました。自分の「いのち」、友達の「いのち」、動物の「いのち」、生き物は「いのち」をもっている。だから、その「いのち」を大事にしようと思いました。そして、この作文を書いて、生きているってすばらしいと思いました。

〈小学校高学年の部〉

最優秀賞

命の大事さ

八尾市立曙川東小学校
六年　彦坂（ひこさか）　歌純（かすみ）

私が日常生活の中で命の大切さについて考えたのは、大好きだった愛犬が亡くなったときです。

生まれたときから約十一年間、ほとんどの時間が愛犬といる時間でした。でも、何年もたっていくうちに、どんどん歩き方が変になっていきました。目も見えなくなって、ご飯もあまり食べなくなって、喜ぶことも少なくなっていきました。愛犬に会いに行っても、ずっとねたままで、動くこともほとんどありませんでした。いろんな方法をためして、なんとかご飯だけは食べさせていたけど、それは長くは続かず、最後は何も食べなくなり、その次の日に、ねたまま、苦しむことなく亡くなりました。それを知ったときは、しばらくの間どうしても信じられませんでした。愛犬の死体を見たとき、体は青白くなっていて、かすかにぬくもりを感じました。ずっと一緒に暮らしてきたので、その分悲しさも大きかったし、もっと一緒に暮らしたかったと思いました。今まで生きてきた中で、こんなに命の尊さを感じたのは初めてだったし、食欲もない状態でした。私が一番辛かったのは、死体を火葬した後の残った骨を見た時です。骨を見た時に思ったのは、想像よりもすごく細くて小さく、大分栄養もなくなっていたということです。きっと、ご飯を食べたくても食欲がないから食べられなかったんじゃないかと思いました。

この経験を通して、私は、命に対しての感じ方が変わりました。初めは、命は一つしかないから大切にしないといけないとしか思っていなかったけど、今は、一度だけあたえられたチャンスみたいなものでもあるし、それを何があってもむだにしてはいけないなと強く感じることができました。今回の愛犬のことを思うと、より強くそれを感じます。私は今までよりももっと、命を大事に生きていこうと思いました。

優秀賞

ぼくのペット

大和高田市立浮孔西小学校
五年　吉村（よしむら）　斗我（とわ）

ぼくは、うさぎを飼っています。名前はハニーです。ネザーランド・ドワーフという種類で、大人になってもとても小さくて、二キログラムくらいしかありません。もう四年くらい飼っているので、人間なら四十才以上らしいです。今まで、毎日えさや水をあげると、モリモリ食べて、うんちもたくさんしていました。

けれども、七月の初めにハニーが急にご飯を食べなくなりました。水も全然飲んでくれませんでした。いつもならあげるとすぐに食べてしまううさぎ用のチュールのおやつも、全然食べてくれませんでした。

ぼくは、病気かと思いとても心配しました。お母さんがインターネットで調べると、うさぎはずっとずっと食べ続けて、ちょうを動かしていないと命があぶないということが分かりました。食べ続けていないと歯ものびてしまうので、もっとご飯が食べられなくなってしまうということも分かりました。

それを知って、ぼくは本当に心配しました。うさぎは、全然鳴いたり気持ちを表現したりしないので、苦しいのか、どこかいたいのか、何も分かりませんでした。

つぎの日、お父さんと、お姉ちゃんがハニーを動物病院に連れていってくれました。その間もぼくは、ドキドキして病気じゃなかったらいいなと思いました。

待っていると、ハニーが帰ってきました。いろいろ調べてもらったけれど、大きな病気ではなくておなかの調子が悪いのと、おく歯が少しのびているので食べられないということが分かりました。

ハニーは、注しゃを二本打って、おく歯もけずってもらって帰ってきました。少しずつ今は元気になってきました。本当に無事でよかったです。ハニーは大切な家族です。

これからも大切に育てていきたいです。

命の重さはみんな同じ

八尾市立曙川東小学校
六年　安達（あだち）　美結（みゆ）

私は、ある動物の番組を見て、「命の重さはみんな同じ」という言葉について改めて考え、ある結論を出しました。

私は、よく動物が出てくる番組を見ます。その番組では、保護された犬やねこなど、動物の過去のお話がたくさん出てきます。例えば、飼い主にぎゃくたいされたり、捨てられたり、飼い主が何らかの理由で亡くなってしまったり。そのような場合、その動物たちはどうなってしまうと思いますか。保護団体に保護される子もいます。ですが、そんなのごく一部。ほとんどの動物たちが寒さや暑さ、交通事故などで死んでしまいます。私は思いました。「なぜ動物たちをそんなに乱暴にあつかうのだろう。」「動物も私たちと同じ命を持って産まれてきたのに。」と。

でも、その番組では、そんな動物たちを助けたり、家を探してあげたりと、保護された動物たちを幸せにするためのボランティアをしていました。私はうれしくなりました。しかし、そんな番組がたくさんあっても助けを求めている動物は増えるばかりで、減ることはありません。だから私は、一匹でも多くの動物たちを助けるお手伝いがしたいです。

「命の重さはみんな同じ」。この言葉には、人間のことだけでなく動物のことも考えられているのではないかと私は思います。私は、これからもこの言葉を大切にして、保護された動物も、まだ保護されていない動物も、どちらの動物たちも助けられる方法を考えていきたいと思います。

命が大切と感じたあの日

八尾市立曙川東小学校
六年　本多（ほんだ）　玲奈（れな）

私は、日常生活の中で命について考えてみました。五月二十七日、家で大切に育てていたハムスターがにじの橋をわたりました。なぜか私の目にはなみだがあふれていました。ペットショップでこの子なら仲良くなれそうだと思い飼いはじめました。初めて手にのせたとき、すごくぬくもりを感じ、この子には幸せになってほしいと思ってつけた名前は「はなちゃん」です。由来は花のように幸せに育ってほしい、という意味です。名前を呼ぶと来てくれるようになり、手の上でご飯も食べてくれるようになりました。はなちゃんともう一匹飼っていた「ジャンくん」と遊んだりしました。だんだん大きくなってきたと思ったら、次の日、八匹の赤ちゃんが誕生しました。一匹も大きな病気をすることなく生まれてきてくれました。

ところが六ヶ月後、はなちゃんが下りのしょう状をおこしました。でもはなちゃんは元気でエサも食べていたのでホッとしました。

しかし、しょう状は悪化していくばかり。私は「はなちゃん死んじゃうのかな」としか考えられませんでした。はなちゃんはぐったりしていて、インターネットで色々調べたりもしました。二日後の放課後、お兄ちゃんがラインで、はなちゃんの写真を送ってきました。急いで遊びからかえると、すでにはなちゃんは息をひきとっていました。思わず私は、はなちゃんをかかえて泣いていました。はなちゃんをうめている間、「はなちゃんは私にいろんなことを教えてくれたんだ、ありがとう。」と考えていました。

このことで、私は、動物も人間も命の重さはみんな同じだということを知りました。大好きだからこそ、その分悲しみも大きいんだと私は思います。これからも命を大切にしていきたいです。

〈中学校の部〉

最優秀賞

僕の家族

大和高田市立高田西中学校
一年　小澤（おざわ）　凛（りく）久

僕の家には、パティーという十六歳の犬が居ます。パティーはパピヨンという犬種のメスです。性格はマイペースで、甘えたい時は甘え、放っておいてほしい時はひとりで玄関で寝ています。おやつをよく食べて、特にさつまいものおやつが好きです。パティーの他に二年前まではチョッパーというオス犬もいました。チョッパーは二年前に肝臓病で十五歳で亡くなりました。チョッパーもパティーも、僕が生まれる前からいて、ずっと一緒に育ってきました。チョッパーとの最期までのことを、ここで書こうと最初は思いました。でも、思い出すと、とても悲しくて、楽しかった思い出もたくさんあるのに、最期のお別れの時の悲しさが勝ってしまい書けません。チョッパーが今いないことが寂しくて、悲しくてとてもつらいです。泣くことも悲しいことも僕は嫌なんです。

お別れが、こんなに悲しいことだなんて思いもしなかった僕は、もう二度とペットなんて飼いたくないと思いました。けれど僕の母は、チョッパーは最期まで幸せだったと僕に言いました。母はチョッパーのことをとても大切にしていて、愛情をかけて育てていたので、僕よりもずっと悲しいはずなのです。それなのに、最期まで見送ってあげられてよかったと言います。動物を飼うということは、楽しいばかりでなく、面倒なことも、辛いことも、悲しいこともあるけれど、全部を引き受けて、大切にしてこそ動物のいのちを預かってもよくて、それが飼う人の責任だと教えてくれました。

パティーもいつかは虹の橋を渡ってしまいます。その最期を思うと辛くて仕方ないけど、生きている今を、後悔のないように、できるだけ面倒を見て、僕も責任を果たしたいと思います。そして、チョッパーは今も変わらず、大切な家族です。会えなくて寂しいけれど、だからって忘れたいとは思いません。

いのちに対して、責任があると僕は知りませんでした。自分のいのちもそうです。他のいのちもそうです。大きい小さいなんてなく、その価値は同じです。だから大切にして、僕は生きていこうと思います。大人になった時に、ペットを飼うかどうかはまだわかりません。一人で責任を持てるかまだ自信がないからです。大事なことだから慎重に考えて、それでも飼いたいと思ったら、その時はしっかりと責任を果たして、最期まで必ず幸せにしてあげたいと思いました。

優秀賞

家族のビタミン

山添村立山添中学校

三年　浦（うら）　愛佳（あいか）

私の家では、一匹の猫を飼っています。その猫は、ちょうど一年前に拾った猫です。名前は「チャコ」です。チャコは生後二週間ぐらいの時に拾いました。拾った時の体重は二百九十グラムでした。片手で持てるぐらい本当に小さかったです。私は元々犬派で、その時、猫を飼うなんて思ってもいませんでした。夜に近所で、

「ニャーニャー。」

と子猫の鳴き声がしたので見に行くと、小さい木の下に一匹の猫がいました。とても小さくかなり痩せていたので連れて帰ることにしました。家に連れて帰り毛布でくるんであげました。ミルクをあげると飲みました。私はこんなに小さな体で本当に頑張って生きているんだと思い、涙が出ました。親猫から離れてしまって、ずっと一人でエサももらえずに必死に生きていたチャコを考えると、「生きていてくれてありがとう、私の家に来てくれてありがとう」と感謝の気持ちでいっぱいになります。

今は体重も約六キログラムあり、元気に暮らしています。私がしんどい時や辛いことがあっても、チャコを見ると、しんどいことも辛いことも忘れることができます。いつもいやしをくれるチャコ。薬を飲むよりもすぐにしんどさを無くしてくれます。そんなチャコは家族のビタミンです。

チャコを飼ってから、命って本当に大切なんだと改めて思いました。この世にはいらない命なんてありません。どの命も本当に大切です。命は神様からさずかった大切なものです。その命を必死に生きて、かけがえのない人生を作っています。人間にも動物にも「生きたかったけど病気や事故で生きられなかった」という人間や動物がいます。生きたいけど生きられない人がいます。でも私達は今、生きることができています。だから一日一日を大切に生き、そして命をつなぐことができます。私は助けることができる命をたくさん助けたいです。命を助けることは本当に難しいし簡単なことではないけれど、自分が生きていることに感謝し毎日を過ごしたいです。

生まれてきてくれてありがとう

橿原市立畝傍中学校

三年　梶（かじ）　陽咲（ひより）

「命は大切」。この言葉を皆は何度も聞いたことがあると思う。だが、本当に大切にできているのだろうか。私から見ると、命を軽視しているように見える。かくいう私も命をあまり大切にできていないと感じる瞬間がたびたびある。だが、ある出来事をきっかけに、命について改めて考えさせられるようになった。

その出来事とは、私が中学に入学する数日前。桜もまだ咲いていない、太陽が照りつける日に起こった。突然祖父が亡くなったと知らされたのだ。自宅に運ばれてきた祖父はあまりにも冷え切っており、それが現実なんだと改めて実感した。もう祖父はいない。もう言葉を交わすことも、一緒に桜を見ることも全て叶わない。生きてさえいればなんでもできる。そばにいることも、「ありがとう」を伝えることもできる。だが、死んでしまってはなにもできない。人はいつ命をおとすのかなんて分からない。命というのは実に儚いものだ。一生を添い遂げると約束した相手でさえも、ふとした瞬間失ってしまう。だからこそ私は、命というのは悲しみばかりを生むものだと思っていた。しかし、逆も然りだろう。確かにふとした瞬間なくなるものかもしれない。それでも、そこにはたくさんの思い出や絆が生まれ、笑顔の花が咲く。その花はどれも各々の花を咲かせ、同じ花は一つとして存在しない。つまりその花、命は、他者では代わりはつとまらない。そのことは祖父の死で痛いほど感じていた。祖父が亡くなり、私の心にはぽっかりと穴が空いており、その穴を全て埋めることのできるものは存在しなかった。きっとそのような経験をしている人は数多くいるだろう。そして、その辛さに耐えかねて命を自らたつ人も中にはいるだろう。私はそんな人たちを救いたい。祖父の死は、私にそう考えさせてくれるきっかけとなった。今の私の夢は臨床心理士だ。一人でも多く希望を与え、命を大切にしてもらいたい。生きていたい、と思ってもらいたい。なぜならその命の代わりはどこにも存在せず、その命には未来があるのだから。

人は必ずいつか死を迎える。これは避けられないことだ。だから生きている時間を大切にし、死ぬまでに私ができることを考え、誰かのために力を尽くしたいと思う。自分だけでなく他の人の命も同じく大切にできる大人になりたい。当たり前だと笑われても「命は大切」と言い続けることをやめないでおきたい。そして私は明日を生きることに希望がもてない人に声を大にして伝えたい。「生まれてきてくれてありがとう」と。

たった一つのいのちの重さ

大阪教育大学附属天王寺中学校
三年　竹本（たけもと）　理央（りお）

私はニュースを通して、「いのち」について考えることが多い。しかし、ニュースを沢山見ていると、次第にいのちの重さについて分からなくなってくる。

最近、和歌山県のアドベンチャーワールドで鳥インフルエンザにかかったアヒルが見つかり、飼育されているガチョウなど約六十羽が処分され、慰霊式が行われたそうだ。感染を最小限にとどめるための選択に、一番心を痛めているのは、当然、飼育員さんや対応した人達だ。可愛がっていた鳥達との別れにやりきれない思いになったにちがいない。感染といえばコロナウイルスがここ数年猛威をふるっている。むろん、人間と鳥は異なるが、感染から「いのち」を守ることの難しさに悲しくなる。

また、韓国のソウルでは雑踏事故がおこり、百五十人以上が亡くなった。殺人や事故などで人が数人亡くなったときは、その人の性格や功績、昔の話など詳しく報道されるため、私は自分の知り合いのように、亡くなった方のことを考え、「いのち」が重く感じられる。しかし、先程の鳥インフルエンザやソウルの事故のように人や動物が多く亡くなると、実感がわかず、他人事のように思ってしまう。決していのちを軽くみているわけではないため、私はそう思ってしまうことに恐ろしさを感じる。戦争や震災にしても同じだ。おそらく、「いのち」の価値は重いにもかかわらず、簡単に消えてしまうということを頭では分かっていても、心はついていかないのだと思う。そして、実際に経験したり、見たりしことのある人にしか「いのち」の重さは分からないと思う。故に私は、いのちの重さを完全には理解することができなくても、戦争を経験した人の本や、「いのち」について考えさせられる本を読むなど、理解する努力をしようと思った。

小学校から何度も言われてきたが、「いのち」はかけがえのないものであり、生きていることは幸せなのである。私は時々、もし死んでしまったら自分はどうなるのだろうか、この世から消えてしまうということはどういうことなのか、と考えるが、考えれば考えるほど怖くなる。しかし、死ぬとき、「いのち」の灯は一瞬で消えてしまう。明日があるかなんて誰にも予測できない。だから、私は自分のたった一つの「いのち」で悔いのないように生きたい。

佳作受賞者一覧

〈小学校低学年の部〉

王寺町立王寺南義務教育学校	一年	黒野　剛
奈良市立明治小学校	二年	西那　杏樹
奈良市立明治小学校	二年	山口　理奈
大和高田市立浮孔西小学校	二年	江上　花梨
大和高田市立浮孔西小学校	二年	東尾　実桜里
橿原市立鴨公小学校	二年	佐藤　杏子
橿原市立鴨公小学校	二年	中谷　実莉
宇陀市立榛原西小学校	二年	白井　衛
斑鳩町立斑鳩西小学校	二年	藤田　和奏
斑鳩町立斑鳩東小学校	二年	柳谷　泰地

〈小学校中学年の部〉

大和高田市立土庫小学校	三年	岩上　蒼真
大和高田市立土庫小学校	三年	東田　怜奈
大和高田市立土庫小学校	三年	山崎　芹
橿原市立香久山小学校	三年	坂口　幸大朗
橿原市立香久山小学校	三年	堂本　爽太
葛城市立磐城小学校	三年	平林　仁乃
王寺町立王寺南義務教育学校	三年	内井　結乃
王寺町立王寺南義務教育学校	三年	北村　勇力
王寺町立王寺南義務教育学校	三年	田口　知瑞
王寺町立王寺南義務教育学校	三年	三島　唯

〈小学校高学年の部〉

大和高田市立磐園小学校	五年	保田	理人
大和高田市立浮孔西小学校	五年	中岡	莉里愛
葛城市立磐城小学校	五年	今西	花奈
八尾市立曙川東小学校	六年	浅川	結寿希
八尾市立曙川東小学校	六年	越智	雄麻
八尾市立曙川東小学校	六年	川上	姫奈暖
八尾市立曙川東小学校	六年	川島	凛子
八尾市立曙川東小学校	六年	鴻野	匠吾
八尾市立曙川東小学校	六年	塩田	優真
八尾市立曙川東小学校	六年	田中	亜花梨

〈中学校の部〉

大和高田市立高田西中学校	一年	秋山	結翔
大和高田市立高田西中学校	一年	川下	陽生
大和高田市立高田西中学校	一年	董	詩音
大和高田市立高田西中学校	一年	松岡	健大郎
大和高田市立高田西中学校	一年	水井	亜紀
大和高田市立高田西中学校	一年	山本	真優
王寺町立王寺南義務教育学校	九年	島尾	昊汰
王寺町立王寺南義務教育学校	九年	茶本	誠太
王寺町立王寺南義務教育学校	九年	日浦	優夢叶
王寺町立王寺南義務教育学校	九年	松田	琳夏

学校賞一覧

大和高田市立浮孔西小学校　　八尾市立曙川東小学校

王寺町立王寺南義務教育学校　　大和高田市立高田西中学校

「いのちの作文コンクール」によせて
～ 審査委員代表メッセージ ～

公益社団法人Knots 代表理事　冨永 佳与子

第一回「いのちの作文コンクール」の選考委員をさせていただきました。みなさんの作品を読みながら、私は、泣いたり、微笑んだり、考え込んだり、大忙しでした。みなさんひとりひとりが、その時その時を大切に思って生きていることが、とても伝わってきたからです。

私は、この間、九百歳の大きな木に出会いました。見上げると、空に向かって、大きく手を伸ばしたように見える木の枝の間から、真っ青な空が見えました。私は、この木は、九百年、ここで暮らして、いったいどんなものを見たのだろうと思っていました。おうちに帰ると、八十八歳の私のお母さんと、十二歳と六歳のワンちゃん達が、いつもの通り、「おかえり」と迎えてくれました。それぞれに生きている「いのち」の時間は違いますが、その流れの中で、「たとえ少しでも一緒に過ごすことって、とてもステキな奇跡じゃないのかな」と改めて思いました。

みなさんの周りでは、どんなステキな奇跡が起こっていますか？お散歩しながら、「かわいいお花が咲いているな」とお花に出会った時、一緒に暮らすペットたちと心が通じた気持ちがした時、お父さんやお母さんや兄弟姉妹、おじいちゃん、おばあちゃん、お友達、みなさんの周りの人たちと大笑いした時、いろんな瞬間、いろんな「いのち」と「つながっているのだな」と思い出してみてください。「生きている」ということは、「ステキな奇跡の瞬間を積み重ねていくこと」だと感じられると思います。

奈良女子大学 教授　天ヶ瀬 正博

わたしたちは、子どものころ、他の生きものたちから、いのちについて学びます。生まれることはうれしく、死ぬことは悲しいと感じるようになります。それから、自分のいのちについて、考えるようになります。そして、気付きます。生きものたちみんなから、喜びや悲しみを、分けてもらっていることに気付きます。いのちを分けてもらっていることに気付きます。だから、自分のいのち、ほかの人たちのいのち、すべての生きものたちのいのちを大切にしようと思うようになります。

いのちがあるということは、生きているということだけではありません。十分に食べたり飲んだりできること。暑すぎたり寒すぎたりせず、きれいな所で、気持ちよくすごすこと。病気やケガをしていないこと。走ったり、とんだり、泳いだり、自分がしたいだけできる時があること。こわいことや無理なことがなくて、心と体を楽にしていられること。それらすべてがあって、いのちがあるということになります。

小学校から中学校のみなさんに、いのちについて書いてもらいました。自分の生活の中で感じたことや、奈良県うだ・アニマルパークで気付いたことが、書かれていました。いろんな生きものたちと人たちと、いのちをともにして、実際に自分で感じて気付いたことでした。どれもすてきで大切なことでした。いのちについて、みんなが感じたこと、気付いたこと、考えたことが、とてもよく書かれている作文がありました。その作文を子どもたちも、おとなたちもみんなで読んで、いのちについて一緒に考えることにしました。

「いのちの作文コンクール」審査委員

公益社団法人Knotsの代表理事	冨永　佳与子
奈良女子大学教授	天ヶ瀬　正博
奈良県道徳教育振興会議学校長代表 王寺町立王寺南義務教育学校長	荒木　篤人
県総務部知事公室 うだ・アニマルパーク振興室長	葛本　雅則
県教育委員会事務局教育次長	春田　晋司
県教育委員会事務局学ぶ力はぐくみ課長	熊谷　啓子

第１回「いのちの作文コンクール」
作　品　集

令和５年３月

奈良県教育委員会事務局
学ぶ力はぐくみ課